

小学館
からの
お知らせ

1/4

速報

第27回

「小学館ノンフィクション大賞」 最終選考結果のお知らせ

大賞

『**帰らざる河** —— 海峡の画家イ・ジュンソプとその愛』
大貫智子(おおぬき・ともこ)

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』2誌主催による「第27回小学館ノンフィクション大賞」の最終選考会（午後5時から）を行い、受賞作を決定いたしました。

今回は大賞に大貫智子『帰らざる河 —— 海峡の画家イ・ジュンソプとその愛』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として300万円が贈られます。

受賞を祝う会は、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。

第27回

「小学館ノンフィクション大賞」
最終選考結果のお知らせ

主催 (株)小学館 週刊ポスト／女性セブン

 大賞 

『帰らざる河 —— 海峡の画家イ・ジュンソプとその愛』

大貫智子(おおぬき・ともこ)45歳

現住所：東京都 職業：新聞記者

【プロフィール】

1975年10月31日、神奈川県生まれ。早稲田大政治経済学部卒。2000年毎日新聞社入社。前橋支局、政治部、外信部を経て、13～18年ソウル特派員。12年と16年に訪朝し、元山や咸興、清津など地方も取材した。論説委員を経て、20年4月より外信部副部長。

【梗概】

韓国で国民的人気を誇る画家、李仲燮（イ・ジュンソプ）の生誕100年記念の展覧会が2016年、ソウルで開かれた。そこには、日本人妻、山本方子への愛情が込められた名作や日本語で記された数々の手紙が展示されていた。

日本統治時代、李仲燮は自由な芸術教育を掲げた文化学院に留学していた。方子は2年後輩で、2人は神田や井の頭公園でデートを重ねていく。

戦局の悪化に伴い、李仲燮は他の朝鮮人留学生と同様に帰郷した。朝鮮・元山からプロポーズの電報が届くと、方子は米軍の機雷攻撃にも恐れず玄界灘を渡った。2人は1945年春、夫婦となった。

金日成主導の土地改革により、豪農で知られた李仲燮一家も土地を没収されたものの、多少の財産は残った。子宝に恵まれ、幸せな新婚生活を送った。

運命が暗転したのは朝鮮戦争の勃発だった。開戦から約半年後の1950年12月、一家は海路、釜山へ避難した。さらに温暖な気候を求めて済州島へ移る。配給されたコメと海辺で採ったカニ、山で摘んだニラを食卓で囲みながら、家族4人は穏やかな時を過ごす。そんな思い出の一コマを李仲燮は画に多く残した。

ただ、息子2人が極度の栄養失調に陥った。方子の実家からは、父が急逝し、遺産相続のため帰郷せよとの便りが届く。方子は子供達を連れて帰国することを決める。「夫とはまた会える」と信じ切っていた。

夫婦は1年後、日本で再会した。李仲燮が船員の資格で渡日できることになったのだ。ただし、1週間で帰ることが条件だった。これが今生の別れになろうとは思ひもなかった。

韓国に戻った李仲燮は、創作活動に一層力を入れる。力強い筆致で知られる「黄色い牛」などの代表

作や、たばこを包む銀紙に錐で刻んだ「銀紙画」はこの頃誕生した。

2人は三日にあげず便りを交わした。李仲燮からの便りには、便箋の隅々にイラストが添えられていた。子供達には「パパが早く行って自転車を買ってあげる」と約束した。1日も早く4人で暮らしたいとの思いが詰まっていた。

1955年1月、李仲燮はソウルで勝負をかけた展覧会を開く。多数の作品を売って、東京に向かうつもりだった。ところが思うように収入を得られず、李仲燮は自らを責めるようになる。拒食症に陥って入退院を繰り返し、方子からの便りに返信することもできなくなった。1956年9月、李仲燮は誰にも看取られずに旅立った。

友人からの電報で、方子は夫の死を知る。それでも幼い子供達の前では涙も見せず、ミシンを踏み続けた。李仲燮の渡日のためにと手を出した事業で詐欺に遭い、借金の返済に追われていたためだった。

次男の泰成は思春期になると、自らの血筋に葛藤を抱くようになる。成人しても定職につかない泰成に、方子は自責の念を感じた。そんな母子を支えたのは、李仲燮が残した作品や手紙だった。

夫婦が共に暮らしたのはわずか7年、李仲燮の死去から60年以上の時間がたった。しかし方子に、時代に翻弄された悲壮感はない。「再婚など考えたこともない」と言い切る。今も心に李仲燮が生き続けている。

【第27回「小学館ノンフィクション大賞」について】

27回目を数える今回は、本年8月末日に募集を締め切り、100を超える力作が寄せられました。この中から次の5作が、本日午後5時から如水会館（東京・千代田区）で開かれた最終選考にかけられ、本年より新たにご就任いただいた星野博美、白石和彌、辻村深月の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

【最終候補作】

- 『浅草物語 —— ロック座会長・齋藤恒久の大衆演劇奮闘記、』
吉田明子
- 『帰らざる河 —— 海峡の画家イ・ジュンソプとその愛』
大貫智子
- 『チャイナ団地 —— とびこみ、自治会事務局長の二〇〇〇日記録』
岡崎広樹
- 『パパ活面接官』
日向琴子
- 『香港ボーイ 15才の小さな戦い』
西谷 格

- 賞金：大賞＝300万円（複数受賞の場合は分割）
- 発表：受賞作は1月発売号の『週刊ポスト』『女性セブン』
および小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。
- 選考委員：星野博美（ノンフィクション作家）、白石和彌（映画監督）、辻村深月（小説家）
- 受賞を祝う会は、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。

【小学館ノンフィクション大賞】

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターに登龍門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『絶対音感』（第4回）、『まぐる土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）、『小倉昌男 祈りと経営』（第22回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢を問いません。